THE FUKUOKA
ASIAN CULTURE PRIZES

第10回
福岡アジア文化賞

THE 10th
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES

1999

大　　賞
GRAND PRIZE

侯 孝 賢（ホウ シャオ シェン）	HOU Hsiao Hsien
映画監督	Film Director
1947年4月8日生	Born April 8, 1947
台　　湾	Taiwan

略　　歴

1947　広東省梅県に生まれる
　　１歳のときに家族とともに台湾に移住
1972　芸術学院映画演劇科（台北）を卒業
1973　映画界に入る。『心有千千結』（李行監督作品）で初めてスクリプターを務める
1975　『雲深不知処』（徐進良監督作品）で初めて助監督を務める
　　『桃花女闘周公』（頼成英監督作品）で初めて脚本を書く
1980　『ステキな彼女』で監督デビュー
1982　『川の流れに草は青々』が金馬奨作品賞・監督賞にノミネート
1983　『少年』（脚本作品）金馬奨最優秀脚本賞
　　『坊やの人形』マンハイム映画祭優秀作品賞
　　『嫁ぐ日』（脚本作品）金馬奨最優秀脚本賞
1984　『風櫃（フンクイ）の少年』ナント三大陸映画祭グランプリ
　　『冬冬（トントン）の夏休み』金馬奨最優秀脚本賞
1985　『冬冬の夏休み』アジア太平洋映画祭最優秀監督賞、ロカルノ映画祭スペシャル・メンション、ナント三大陸映画祭グランプリ・国際批評家連盟賞
1986　『童年往事―時の流れ』ベルリン映画祭国際批評家連盟賞、アジア太平洋映画祭審査員特別賞、ハワイ映画祭審査員賞
1987　『童年往事―時の流れ』ロッテルダム映画祭非欧米作品最優秀賞
　　『恋恋風塵（れんれんふうじん）』ナント三大陸映画祭最優秀監督賞
　　『ナイルの娘』トリノ映画祭審査員特別賞
1989　『悲情城市』ヴェネチア映画祭グランプリ、金馬奨最優秀監督賞
1993　『戯夢人生（ぎむじんせい）』カンヌ映画祭審査員賞
1995　『好男好女』ハワイ映画祭最優秀作品賞、金馬奨最優秀監督賞
1996　『好男好女』シンガポール映画祭特別功労賞・国際批評家賞、アジア太平洋映画祭最優秀監督賞、長春映画祭グランプリ・最優秀監督賞、『憂鬱な楽園』金馬奨最優秀音楽賞
1998　『フラワーズ・オブ・シャンハイ』アジア太平洋映画祭最優秀監督賞、金馬奨審査員大賞、ケララ映画祭グランプリ

主な監督作品

『ステキな彼女』（1980）　『風が踊る』（1981）　『川の流れに草は青々』（1982）
『坊やの人形』　（1983）　『風櫃の少年』（1983）　『冬冬の夏休み』（1984）
『童年往事―時の流れ』（1985）　『恋恋風塵』（1987）　『ナイルの娘』（1987）
『悲情城市』（1989）　『戯夢人生』（1993）　『好男好女』（1995）　『憂鬱な楽園』（1996）
『フラワーズ・オブ・シャンハイ』（1998）
その他、スクリプター２作品、助監督15作品、脚本18作品、製作３作品。また、２作品に主演として出演。

贈賞理由

侯孝賢氏は今日の世界で最も注目されている映画監督のひとりであり、アジアを代表する芸術家のひとりである。

1947年に広東省梅県に生まれた氏は、1歳のときに台湾に移住し、台湾で育った。大学では映画を専攻し、1973年に映画界に入った後、1980年に映画監督としてデビューした。

1980年代初期の台湾映画界は、それまでの娯楽的あるいは国策的な映画づくりの枠を越え、新しい芸術的な動きがわき起こった時期として世界の映画の流れのなかでも特筆される。その大きな動きのなかにおいて代表的かつ主導的な映画監督として世界的にも注目されたのが侯孝賢氏である。

侯氏の監督作品である『風櫃の少年』『冬冬の夏休み』『童年往時―時の流れ』『恋恋風塵』などの作品はいずれも台湾の風土とそこに育った若い人々への熱い愛着にあふれ、抒情的で写実性に優れた秀作である。これらの作品は台湾ニューウェーブと呼ばれた他の監督たちの作品ともども、長らく戒厳令下にあった台湾で、その厳しい状況にもかかわらず、深い人間的共感がはぐくまれ、みずみずしい理性と感性が磨かれてきたことをよく示す。それらはまた、ほぼ同時期に同じように注目を集めはじめた東アジアの他の新しい映画と呼応し合って、アジアの映画、ひいてはアジアの芸術、文化の興隆を世界に向かって強く宣言するものであった。

1980年代の後半から1990年代にかけて、台湾は政治的にも社会的にも自由化、開放化の方向に大きく変化するが、1989年の氏の大作『悲情城市』は、この変化をリードする力を持った作品であり、ヴェネチア国際映画祭のグランプリを獲得するなどして、この動きの意義を世界に知らしめ、確固たるものにした。氏の映画によってはじめて台湾の社会と人間に強い関心を持つようになった人々は世界に少なくない。侯氏はそれ以後もひきつづき『戯夢人生』『好男好女』『フラワーズ・オブ・シャンハイ』などの多様な作品を次々と発表し続けている。

以上のような侯孝賢氏の映画は、総じて深く台湾の現実を見つめ、中国文明を考え、人々の生きる願いをくっきりと描き出したものであり、そこには現代アジアの芸術のひとつの精髄がある。まさしく「福岡アジア文化賞―大賞」にふさわしい業績である。

学術研究賞
ACADEMIC PRIZE

大林（おおばやし） 太良（たりょう）	OBAYASHI Taryo
東京大学名誉教授	Professor Emeritus, the University of Tokyo
1929年5月10日生	Born May 10, 1929
日　本	Japan

写真提供　共同通信社
Photo: courtesy of Kyodo News

略　　歴

1929	東京都に生まれる
1949	第八高等学校文科甲類卒業
1952	東京大学経済学部経済学科卒業
1952-59	東京大学東洋文化研究所助手
1955-56	フランクフルト大学民族学科留学
1956-57	ウィーン大学民族学科留学
1957-58	ハーバード大学ハーバード燕京研究所留学
1958-59	ウィーン大学民族学科留学
1959	ウィーン大学ドクター・デア・フィロゾフィー（哲学博士）取得
1962-66	東京大学教養学部講師（文化人類学）
1966-75	東京大学教養学部助教授
1967-68	ハイデルベルク大学南アジア研究所客員教授
1975-90	東京大学教養学部教授
1982-84	日本民族学会会長
1990	東京大学名誉教授
1990-96	北海道立北方民族博物館館長
1990-97	東京女子大学現代文化学部教授
1994	ボン大学日本文化研究所客員教授
1996	朝日賞受賞

主な著作

『東南アジア大陸諸民族の親族組織』日本学術振興会，1955
『日本神話の起源』〔角川新書〕角川書店，1961（新版，〔徳間文庫〕徳間書店，1990）
『葬制の起源』〔角川新書〕角川書店，1965（新版，〔中公文庫〕中央公論社，1997）
『神話学入門』〔中公新書〕中央公論社，1966
『稲作の神話』弘文堂，1973
『日本神話の構造』弘文堂，1975
『神話と神話学』大和書房，1975
『邪馬台国―入墨とポンチョと卑弥呼』〔中公新書〕中央公論社，1977
『神話の話』〔講談社学術文庫〕講談社，1979
『伊勢・出雲』（世界の聖域11）講談社，1980（仏訳『Isé et Izumo』Robert Laffont, パリ，1985）
『東アジアの王権神話』弘文堂，1984
『シンガ・マンガラジャの構造』青土社，1985
『東と西 海と山―日本の文化領域』小学館，1990
『北方の民族と文化』山川出版社，1991
『神話の系譜―日本神話の源流をさぐる』〔講談社学術文庫〕講談社，1991
『正月の来た道―日本と中国の新春行事』小学館，1992
『海の神話』〔講談社学術文庫〕講談社，1993
『北の神々 南の英雄―列島のフォークロア12章』小学館，1995
『海の道 海の民』小学館，1996
『北の人 文化と宗教』第一書房，1997
『仮面と神話』小学館，1998
『銀河の道 虹の架け橋』小学館，1999
※出版地のないものは、すべて東京で出版

贈賞理由

大林太良氏は日本を代表する民族学者であり、約半世紀にわたり日本の民族文化がどのように形成されたかをアジア諸地域の文化との比較研究を踏まえて世界文化史の文脈で巨視的に捉え、提示し続けている泰斗である。

大林氏は東京大学経済学部に進むが、民族学の岡正雄氏や文化人類学の石田英一郎氏に大きな影響を受け、独学で民族学を学び、卒業後は東大東洋文化研究所の助手となった。1955年、当時世界の民族学研究の中心となっていた欧米に留学し、ドイツ、オーストリア、アメリカなど各国の大学院で学んだ後、1959年にウィーン大学で学位を取得した。

大林氏は専門の民族学分野はもとより時代や地域を越え広く関連する分野の文献をほとんど渉猟し、歴史学から考古学、言語学などにいたるまで造詣が深く、慧眼をもった博学多識の学者であり、その研究領域の広さと学識の深さに裏打ちされた民族学研究により、日本文化を成り立たせているさまざまな文化の流れを解明してきた。例えば、日本文化の系統と特質を明らかにするためにその材料として神話を取りあげるというユニークな方法論をとり、日本神話の再構成に立って日本文化の真髄を詳解してきた。そして、日本と世界の神話の系統論的比較研究を通じて、民族学に新境地を拓いた。同氏の研究は、常に日本文化から発題し、世界文化史を論じながら日本文化へ収斂するというあくなき探求心にもとづいており、さらに手堅い比較研究を積みあげ、神話を通じてそれぞれの時代と民族の最も高い価値概念の背景を探り続ける手法には、同氏の民族学の真骨頂が見られる。1961年に32歳の若さで刊行された名著『日本神話の起源』は、改版されつつ40年にわたり今も読み続けられている。

1962年から28年間にわたり東大の民族学担当教官として後進の指導に努めるとともに、大学における民族学講座の定着と発展に尽くしてきた。また、講演会等を通じて民族学のおもしろさを伝えると同時に、学問への姿勢を示すことにより、新たな学問のすすめを説いてきた。1982年から84年まで日本民族学会会長を務め、東大退官後は東京女子大学で教鞭をとるかたわら、北海道立北方民族博物館長としての重責を果たし、北方民族研究の発展に大きく貢献した。その真摯で温厚な人柄により多くの学生から同僚までの尊敬を集めており、現在も欧米の大学等で客員教授として招聘を受けるほどの国際的な活躍を続けている。

このように大林氏の幅広い民族学研究の活動および国内外での活躍、さらに優秀な民族学研究者を世に送り出した人材養成など、日本・アジアを中心としての民族学・神話学研究への貢献は顕著なるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞－学術研究賞」にふさわしいといえる。

学術研究賞
ACADEMIC PRIZE

ニティ・イヨウシーウォン	Nidhi EOSEEWONG
チエンマイ大学教授	Professor, Chiang Mai University
1940年5月23日生	Born May 23, 1940
タ　イ	Thailand

略　　歴

1940	バンコクに生まれる
1962	チュラロンコン大学文学部歴史学科卒業
1966	チュラロンコン大学文学部歴史学科修士課程修了 チエンマイ大学人文学部歴史学科講師就任
1971-75	ミシガン大学博士課程に留学
1976	ミシガン大学歴史学博士号取得
1976-77	チエンマイ大学人文学部歴史学科長
1978	タイ社会科学協会主催セミナー「アユタヤ公文書にみるラタナコーシン王朝の歴史」で報告、大きな反響を呼ぶ
1981-87	チエンマイ大学人文学部歴史学科修士課程カリキュラム委員長
1982-83	京都大学東南アジア研究センター客員教授
1983-88	チエンマイ大学人文学部歴史学科学士課程カリキュラム委員長
1983-	この年から『芸術と文化』(総合学術誌)『本の世界』(一般誌)に評論を発表
1985	チエンマイ大学人文学部教授に昇進(助教授、准教授を飛び越えた昇進)
1991	プリディー・パノムヨン博士記念賞受賞
1993	プワイ・ウンパーゴン博士記念賞受賞
1998	ブーラパー大学より歴史学名誉学位を授与

主な著作

「デーヴァラージャ信仰とアンコール朝のクメール王権」<英文>(『初期東南アジア史の研究:東南アジア国政の起源』ミシガン大学南アジア・東南アジア研究センター, アン・アーバー, ミシガン, 1976)

ประวัติศาสตร์รัตนโกสินทร์ในพระราชพงศาวดารอยุธยา『アユタヤ王朝年代記にみるラタナコーシン朝史』バンナーキット, 1980

ปากไก่และใบเรือ『鶏口と船帆』アマリン出版社, 1984

การเมืองไทยสมัยพระนารายณ์『ナライ王時代のタイ政治』タマサート大学出版, 1984

การเมืองไทยสมัยพระเจ้ากรุงธนบุรี『タークシン王時代のタイ政治』シンラパワッタナータム出版社, 1986

เกียวโตใต้ชะเงื้อมดอยสุเทพ『チエンマイの人間がみた京都』マティチョン・プレス, 1989

เชิงอรรถสังคมไทยในสายตานักวิเคราะห์『分析的にみたタイ社会』コーモン・キムソン財団, 1989

ลัทธิพิธีเสด็จพ่อ ร.๕『5世王崇拝儀礼』シンラパワッタナータム出版社, 1993

ท่องเที่ยวบุญบั้งไฟในอีสาน『イサーンのロケット花火祭り観光』マティチョン・プレス, 1993

ชาติไทย, เมืองไทย, แบบเรียนและอนุสาวรีย์『タイ国民、タイ国、教科書、記念碑』マティチョン・プレス, 1995

กรุงแตก, พระเจ้าตากฯและประวัติศาสตร์ไทย『アユタヤ陥落、タークシン王、そしてタイ史』マティチョン・プレス, 1995

โขน, คาราบาว น้ำเน่า, และหนังไทย『コーン、カラバオ、マンネリ、タイ映画』マティチョン・プレス, 1995

ผ้าขาวม้า, ผ้าซิ่น, กางเกงในและฯลฯ『男性用腰巻き布、女性用腰巻き布、パンツなど』マティチョン・プレス, 1995

สองหน้าสังคมไทย: บทวิพากษ์โครงสร้างอารยธรรมไทย『タイ社会の2つの顔:タイ文明の構造批評』マネージャー・プレス, 1996

สังคมไทยในกระแสการเปลี่ยนแปลง『変動期のタイ社会』学術研究促進委員会, 1996

※出版地のないものは、すべてバンコクにて出版

贈賞理由

ニティ・イヨウシーウォン氏は、タイが生んだ優れた歴史学者であり、同時にタイを代表する知識人でもある。同氏は1966年にチエンマイ大学に職を得てから、アメリカで博士号を取得する期間を除くと、現在まで一貫して古都チエンマイに腰をすえ、そこからタイ、さらには世界の人々に向けて刺激的な書物を著し続けてきた。

ニティ氏がめぐらす思索は、絶えず地方の文化や伝統に密着しながら、同時にそれは地方を越え、タイの国民国家の問題へ、カンボジア、ラオス、ミャンマー、インドネシアなどの近隣諸国の文化や民族の問題へ、そして国を越えた、より普遍的な世界へと跳躍する。また、その研究のテーマは歴史家の枠を大きく越えて、時に中世や近代のタイであり、現在のタイであり、未来のタイであり、時間を越えて自在に駆け巡るのである。

ニティ氏は、1980年代から精力的にタイの歴史に関する研究書を次々と刊行してきた。それらは、従来の王朝変遷史を軸とするタイの歴史像や歴史観、欧米の歴史学にのっとった従来の歴史記述方法などをすべて塗りかえていくほどの画期的なものであった。例えば、代表作のひとつである『Pak Kai lae Bai Rua（鶏口と船帆）』（84年）、つまり「文学と貿易」は、19世紀のタイの詩歌や伝承文学の行間を読み解くことでタイ社会のブルジョア的発展を証明するという、まったく斬新な研究であった。同氏の歴史研究は、公文書、寺院文書、欧米旅行者たちの記録などの厳密な史料批判に常にもとづいているが、特筆すべきは、こうした史料を読み解くことで新しい歴史像を創りだしていく、その豊かな歴史構想力こそであろう。それは、タークシン王のトンブリー朝の歴史、ナライ王時代のアユタヤ朝の歴史の研究にも共通している。

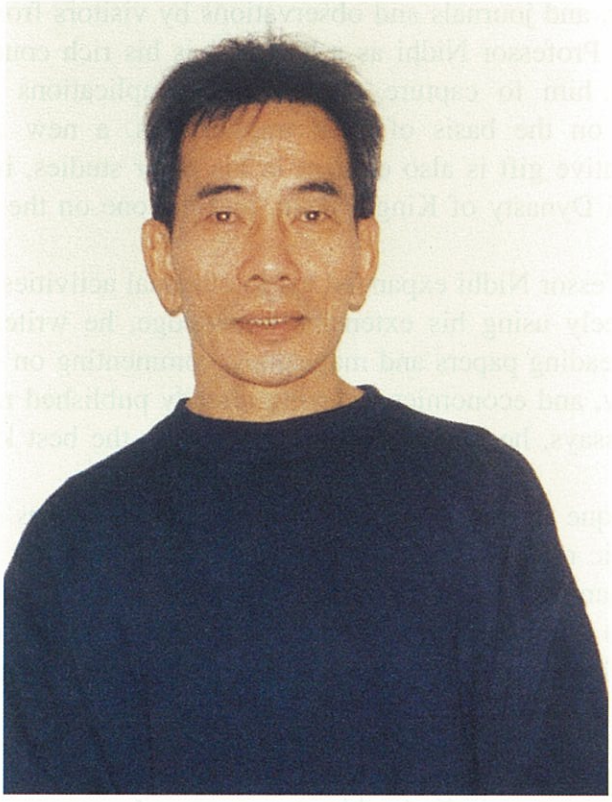
その後、ニティ氏は時事評論の分野にも進出し、文化、政治、社会、経済などについて、その厖大な知識を駆使しつつ、ウィットと警句にみちた文章を代表的な雑誌や新聞に発表し続け、タイではもっともよく知られたオピニオン・リーダーとなっている。すでにそうした本も10指に余る。

ニティ氏はまた、思索や研究の成果をタイ語で書くという姿勢を貫いている点でも、タイ知識人のなかでは独自の地位を占めている。タイ語を通じてどこまで普遍的な世界に迫れるか、その方針はチエンマイを拠点に、タイの文化や国家を、そして世界を語る同氏の姿勢とも相通じている。

ニティ氏の著作はタイ語で書かれているが、その抜きんでた業績と活動に対しては、タイはもとより日本、欧米においても高い評価が与えられており、まさに「福岡アジア文化賞―学術研究賞」にふさわしいものである。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

タン・ダウ	TANG Da Wu
ヴィジュアルアーティスト	Visual Artist
1943年5月12日生	Born May 12, 1943
シンガポール	The Republic of Singapore



略　　歴

1943	シンガポールに生まれる
1968	シンガポール国立青年指導研究所より青年社会活動に対し学位取得
1970	英国留学
1970-74	バーミンガム工芸美術大学で彫刻を学ぶ
1974-75	セント・マーティン美術大学（ロンドン）で彫刻を学ぶ
1978	英国アーツ・カウンシルより視覚芸術賞
1982	ロンドン・アーツ・カウンシルより芸術家賞
1983-85	ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジの修士課程に学ぶ
1988	シンガポールに帰国
	アーティスツ・ヴィレッジ設立

主な展覧会と作品

1978	「しるし—モスリンを通って落ちる黒い粉」，アクメ・ギャラリー，ロンドン
1980	「アース・ワークス」，国立博物館アートギャラリー，シンガポール
1981	「森を救え」，エピングの森，英国
1983	「ファースト・ムーブ」，オルタネイティバⅢ国際パフォーマンスフェスティバル，アルマダ，ポルトガル
1988	「とうとう私の母はキャットフードとドッグフードを食べることに決めた」，オーチャードロード，シンガポール
1989	第３回アジア美術展，福岡市美術館
	「開門」，アーティスツ・ヴィレッジ，シンガポール
	「救命ボート」，オーチャードロード，シンガポール
	「彼らは犀を密猟し、角をきってこのドリンクを作った」，国立博物館アートギャラリー，シンガポール
1991	アジア現代作家シリーズ５「タン・ダウ展」，福岡市美術館
1992	シンガポール芸術祭，ホン・ビー・ウェアハウス，シンガポール
	美術前線北上中—東南アジアのニューアート展，福岡市美術館ほか
1994	アジアの創造力展，広島市現代美術館
1995	第３回チェンマイ・ソーシャル・インスタレーション，タイ
	「私は日本で生まれた」，ソロ，インドネシア
1995-96	「タピオカ・フレンドシップ・プロジェクト」，シンガポールほか
1996	「片手の祈りプロジェクト」，広島市現代美術館
1996-98	「回復へのゴムの道」，マレーシアほか
1997-98	「錫の一生」，シンガポールほか
1998	「木の心、人の心」，シンガポール及びマレーシア
1999	第１回福岡アジア美術トリエンナーレ，福岡アジア美術館
	「心配しないで、ご先祖様」，シンガポール

贈賞理由

タン・ダウ氏は、シンガポールを拠点に1980年代、90年代を通して活動し、東南アジアのアートシーンを今日の隆盛に導く主導的な役割を果たしてきた。同氏は街頭でのパフォーマンスや日用品によるインスタレーション（仮設的な空間造形）、観衆との共同作業や子供たちとのワークショップなど、斬新な表現形式を大胆に採用し、環境問題や人権問題などの極めて今日的かつ社会的なテーマを中核に、それまでの東南アジアの美術界には見られなかった新たな表現領域を切り開き、東南アジアの芸術・文化界に大きな影響を与えてきた。その意味では東南アジア現代美術界の真のパイオニアということができよう。

1943年、日本占領下のシンガポールに生まれ、英国統治下のシンガポールで中国式の教育を受けた後、1970年に英国留学。英国現代美術の発信源であったセント・マーティン美術学校やゴールドスミス・カレッジで、現代美術の手法や問題意識を身につける一方、自らのアイデンティティの問題を考え続けた。1988年に活動拠点を故国に移すと同時に、観光客で賑わう目抜き通りでのパフォーマンスを敢行し、同年、彼の回りに集まってきた若者たちを糾合して、シンガポール北部センバワンの農場に＜アーティスツ・ヴィレッジ＞を結成した。これはともに作品を制作し、展覧会を開催し、共同でパフォーマンスを繰り広げる芸術共同体である。この共同体は、先頭に立つ同氏のもとでシンガポールのアートシーンを席巻した。

このようなタン・ダウ氏の活動や作品は、シンガポールの若い世代の挑戦的なアーティストたちを惹きつけた。カリスマ的な影響力を発揮し始めた同氏は、その活動を通して、常に若いアーティストを励まし、刺激し、鼓舞し続け、＜アーティスツ・ヴィレッジ＞から誕生した世代が、今や東南アジアのアートシーンの中心作家となっている。

その後もタン・ダウ氏の活動は、マレーシア、フィリピン、インドネシアと広がり、今日、東南アジアにおけるもっとも代表的な現代美術家として高い評価を受けている。日本でも「タン・ダウ展」（1991年 福岡市美術館）、「美術前線北上中」展（1992年　福岡市美術館ほか）、「アジアの創造力」展（1994年 広島市現代美術館）などでたびたび紹介されている。

タン・ダウ氏の作品の魅力は、たんに前衛的な新しさや、社会的テーマの過激さの中にあるのでもなく、芸術作品としての質の高さにのみ求められるのでもない。中国系シンガポール人として、中国文化を意識した自己の体内にある文化とアイデンティティの問題を追求し続け、アジアにおける美術の真の独自性とは何かを常に問い続けていることにこそ、その魅力と特質がある。このようなタン・ダウ氏の芸術活動とその姿勢は「福岡アジア文化賞―芸術・文化賞」にふさわしいといえる。

公式行事スケジュール

行　　事	日　　時	場　　所
○記　者　会　見	9月24日（金） 午後4時～5時	福岡市役所15階第4会議室
○市民フォーラム		
・アジア神話セミナー 「九州の神話からみる日本、そしてアジアへ」	9月25日（土） 午後0時30分～3時	福岡市役所15階講堂
・東南アジア歴史セミナー 「アユタヤと日本人」	9月25日（土） 午後3時～5時30分	アクロス福岡イベントホール
・疾走するアジアの現代美術 「君は、タン・ダウを見たか」	9月25日（土） 午後5時～7時	博多リバレイン･アトリウムガーデン
・アジア映画セミナー 「侯孝賢、その映画の世界」	9月26日（日） 午後0時30分～4時	エルガーラ大ホール
○受賞者フォーラム 「My Challenge, My Asia」	9月26日（日） 午後3時～5時	アクロス福岡イベントホール
○授賞式	9月27日（月） 午後2時30分～3時30分	福岡市博物館
○祝賀会	9月27日（月） 午後4時～5時	福岡市博物館
○学校訪問	9月28日（火） 午後2時10分～3時40分 午後2時～3時30分	 城南中学校 高取中学校
○関連イベント		
・「侯孝賢監督傑作選」	8月25日（水）～27日（金）	福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
・アジアフォーカス・福岡映画祭'99 協賛企画「侯孝賢　レトロスペクティブ1980－87」	9月15日（水）～19日（日）	エルガーラ大ホール
・疾走するアジアの現代美術 関連企画 親子で体験するタン・ダウの世界 ～バナナの心・人の心～	9月23日（木） 午後1時30分～3時30分	福岡アジア美術館交流スタジオ
・「タン・ダウの軌跡展」	9月23日（木）～11月7日（日）	福岡アジア美術館交流ギャラリー

授　賞　式

日　　時：9月27日（月）午後2時30分～3時30分
会　　場：福岡市博物館1階グランドホール

1999年（第10回）福岡アジア文化賞授賞式は、受賞国大使館関係者をはじめ、国・自治体、国際交流団体、経済団体、大学や地域団体の代表者等約300名の参加を得て、福岡サロンオーケストラによる演奏の中、厳かにスタートした。

今回、第10回を迎えた福岡アジア文化賞の経緯を説明、引き続き、今回の受賞者のプロフィールや受賞にいたったこれまでの研究・芸術・文化活動の一端を紹介し、その業績を讃えた。その後、ステージでは主催者挨拶、来賓による祝辞、選考経過報告と続き、主催者により賞の贈呈が行われた。4名の受賞者は受賞後のスピーチで喜びを表し、福岡市民や福岡アジア文化賞に対するメッセージなどを語った。

授賞式に先立ち、桑原敬一博物館長が各受賞者を出迎え、2階常設展示場等を案内した。また、山崎広太郎福岡市長が受賞国大使館からの出席者と懇談を行った。

受賞者挨拶

侯　孝　賢

初めに福岡アジア文化賞委員会からこのような大賞を授与していただき、ありがとうございました。映画作りの仕事は26年にわたり、私はそれ以外のことは何もできません。やるべきことをやっただけなのに賞までいただいて、これはすべて皆様のご好意と厚い愛情によるものだと思います。

中国の偉大な思想家であり、実践者である孔子が、かつて自分の生涯の学問・言論や著作について「述べて作らず」と言っています。「述べて作らず」とは、ただ先人の業績を記録し、新たに創作しないということです。

孔子は、自分の仕事について、それまでの夏・商・周の1500年の中国文明を自分の手を通して整理し、明らかにしただけだと考えていました。中国人は「明明徳」と言いますが、前者の明は説明する、明らかにするの「明」、後者の明徳は明白な徳行であり、いいもの万事万物、全ての造形と制度であります。中華文明は明徳だと我々は言いますが、孔子のしたことは、このような明徳を見事に整理し明らかにすることでありました。自分がその作業をやらなければ誰もやれないと孔子はよく分かっていました。歴史は証明します。「孔子がいなかったら、中国は永遠に夜のように暗かった」と。孔子自身は何も作らず、記録しただけですが、しかし彼が記録し、整理し、明らかにしたものは中国文明を更に2000年も長生きさせました。

勿論、孔子は孔子であり、私はただの映画製作者です。私はこれまで半生にわたり映画を撮り続けてきたし、今後もおそらく撮り続けていくでしょう。

しかし私は自分のやっていることを、だんだん「述べて作らず」だと思うようになりました。というのは、私が撮っている現実世界に対して、私はますます自分が一人の観察者であり、記録者であるに過ぎないと思うようになったからです。撮影する相手に対しては敬意とやさしさが必要です。私はできるだけそれらを捉えて再現し、干渉したり加えたりはしません。この点から見れば「述べて作らず」と言えるのです。

素直にそのままを述べる。これが今の私の好きなことであり、私の求める映画の境地でもあります。これをもって私の受賞の挨拶といたします。福岡アジア文化賞委員会の皆様、会場の皆様、ありがとうございました。

大林　太良

このたびは「福岡アジア文化賞」を授与されることになり、誠に望外の光栄と存じます。私のこれまでの研究活動を評価し、推薦してくださった方々、関係の方々に厚く御礼申し上げます。

人類の文化は、その初期から今日に至るまで、さまざまな地域、伝統の間の交流や刺激によって発達してきました。日本もまたその例外ではありません。そして日本の中でも九州、ことに福岡は、その交流における門戸として、歴史上大きな役割を果たしてきました。その福岡で「福岡アジア文化賞」を頂戴するのは、ひとしお大きな感激であります。

アジアはその自然環境、文化的伝統において、けっして一つではありません。極北・亜極北の寒冷な地帯、内陸アジアの乾燥地帯、温帯の中国・朝鮮・日本の東アジア世界、熱帯・亜熱帯の東南アジアは、それぞれ異なった自然条件と文化的伝統をもっております。このアジアの多様性が日本文化を豊かにしてくれました。アジア大陸の東の海上に東北から西南に連なる日本列島は、実はこのようなさまざまなアジアの地域からの影響を受け、それを新しい文化に統合していく地位にあります。北方の狩猟漁労民文化とのつながりは、北海道のアイヌ民族の熊送り儀礼ばかりでなく、本州北部の鮭の漁獲をめぐる習俗や信仰にも認められます。中国を中心とした東アジアの農耕文化、ことに水稲耕作がこの福岡の地に入り、そこから列島に広がって、その後の日本文化・社会発展の基礎を作りました。また支配者が山頂に天下る神話が、日本と朝鮮においてことに類似していることは、日本における王権の発達が九州を経由して朝鮮との関係が無視できないことを示唆しております。そして東南アジアとの関係は、ことに海幸山幸神話がインドネシアに多くの類話をもつことに示されています。そして南九州の隼人がこの関係において要の地位を占めておりました。

「福岡アジア文化賞」を頂戴したことは、私の今までの日本とその周囲のアジアの諸文化の比較研究という営みが認められたことを意味しております。それは私にとって大きな誇りであるとともに、今後の研究にとっても大きな激励であります。人類文化におけるアジアの地位と役割について、これからも民族学、神話学の立場から一層研究を深めて行きたいと思っております。

改めて心からお礼の言葉を申し上げたいと存じます。

ニティ・イヨウシーウォン

このたび、福岡アジア文化賞の学術研究賞をお贈りくださった福岡市民の皆様、福岡アジア文化賞委員会、よかトピア記念国際財団に対し、心より御礼を申し上げます。

この賞を受賞できましたことを大変光栄に存じますと同時に、過去の受賞者の名前を拝見しました時、私には過分の賞ではないかと思わずにおれません。

福岡市から贈られるこの栄えある賞は、私にとりましては特別の意味合いを持っています。地域社会が独自のビジョンを形成する機会をほとんど持つことのできない国にとって、福岡アジア文化賞は、地域社会がどのように、長期的視野を持ち、自国の枠を大きく越え、地域内に新たに建設的な関係網を作ることができるかの例を示してくれるからです。

私は今こそ中央と地域の新しい関係が構築され、広い範囲に浸透し実践されるべきだと考えます。というのは、私たちが迎えようとしている21世紀は、国の政治体制が次世代世界の経済、社会、文化状況にうまく対応できなくなると想像できるからです。東南アジアを筆頭に世界の隅々で見られる多国間協力の動きでは、社会の大部分を形成する「小さな人々」、つまり権力を持たない大多数の市民は、国内大企業、国際大企業から搾取される一方で、自らの資源を自ら守ってやるだけの力を持ちうることができない状況にあるのです。

世界は、経済だけでなく、社会、政治的な動きも急速に変化しています。タイではその動きが特に顕著です。われわれは、自分の将来に新しいビジョンを描かなければなりません。そのためには、自分の過去について新しい見方を持つということが必要になります。自分の過去をどう見るかによって、現在と未来を描くことができるからです。私は、タイの歴史家としてこれまでの研究の中で、タイの過去を、これまでに受け入れられてきた歴史の解釈とは違った角度から、違った観点で、再考察しようとしてきました。結果がどうであれ、私はこういった取り組みが、タイの人々が21世紀の変わり行く世界の状況に、より効率的に対処できるだけの力を持てるような歴史観を養う上で欠かすことができないものであると信じます。今日いただいた賞は、私よりも賢人で学識のある他の研究者達が、タイの新しい過去を構築する私の動きに加わり、我々自身の現在と未来を形作る契機になればと願います。

タン・ダウ

山崎広太郎福岡市長、川合辰雄よかトピア記念国際財団理事長、外交機関の代表者の皆様、ご来賓の皆様、そして会場の皆様。

様々な国の方々が私を推薦してくださったお陰で、今回、第10回福岡アジア文化賞の芸術・文化賞を受賞することができ大変光栄に存じます。私は、今、インドや韓国、中国、タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシア等の私が尊敬する多くのアーティストのことを考えています。彼らの多くがこの賞をもらうに値するアーティストであり、彼らの作品は私に多くの感動を与えてくれました。私は今回、私がいただいた福岡アジア文化賞が、私個人に対して与えられた賞ではなく、私が勝ち取ったものでもないと考えます。私が他のアーティストの誰よりも優れているというのではなく、彼らと同じなのです。ですから、この賞を皆と共にいただいたのだという気持ちで受賞させていただきます。

この賞は私にとって、誰かが私に手をさしのべて、「我々は同じ仲間なんだから、一緒にやろうよ」と声をかけてくれたものだと感じられます。私はその声に「イエス」と答えるのです。福岡アジア文化賞の皆様、よかトピア記念国際財団の皆様、そしてこの賞の創設者のお一人である桑原敬一様。共に手を携え、同じビジョンを共有しようではありませんか。

この賞を受けるにあたり、次のアーティストの名前を思い起こさずにはおれません。ガンを患い、最近、倒れてしまったモンティエン・ブンマーさん、貴方のことを思っています。早く回復されるよう願っています。三上浩さん、10日前に他界してしまった貴方は素晴らしいアーティストでした。貴方がどこにいようとも貴方のことを思っています。そして5年前にこの世を去ってしまったロベルト・ヴィラヌエヴァさん、本当に偉大なアーティストであった貴方と多くのことを分かち合いました。今、貴方のことを思っています。

私がいつも心に留めている創造的分野や文化、そして市民活動に積極的に取り組む人々は全て「アート」です。全てが学術や社会の他の分野と同様に重要なものです。美しい芸術や文化が花開くインドのような国が目に浮かびます。芸術や文化が花開くためには、民主主義が重要な役割を果たすと考えます。インドは1947年の独立以来、民主的に保たれてきています。インドで芸術文化が花開いている理由はそこにあるのでしょう。一方で東南アジアを考えてみると、さほど民主的であるとは言い難く、そこに芸術・文化が遅れをとっている理由の一つがあるのではないのでしょうか。

私は自分の活動が民主主義へとつながっていくことを信じています。そこでは意志の疎通が大きな役割を果たします。しかし言葉のやりとりのみが意志疎通の手段ではありません。遊ぶこともその一つです。私はたくさん遊びます。会話は一つの手段であり、もっといろいろな営みをします。私はそれらの営みを遊びと呼び、その遊びが意志疎通をより完璧なものにしてくれるのです。私はこれからも遊びを続けます。それに人々が加わり、意志疎通が更に活発になり、ひいては民主主義の実現へと広がっていくのです。

ご静聴ありがとうございました。

受賞者フォーラム

日　時：9月26日（日）午後3時～5時
会　場：アクロス福岡イベントホール
参加者：約200名

1　テーマ　「My Challenge, My Asia」
2　出演者

大賞受賞者	侯　孝　賢
学術研究賞受賞者	大林　太良
学術研究賞受賞者	ニティ・イヨウシーウォン
芸術・文化賞受賞者	タン・ダウ
コーディネーター：中部大学教授	小倉　貞男

3　概　要

今年で2回目となる受賞者フォーラム。受賞者それぞれが人生の過程でどのようなチャレンジを経験してきたのか、21世紀に向けてアジアはどうチャレンジしていくのか。コーディネーターをつとめる小倉氏は「個性豊かな受賞者が語る人生や動機づけからヒントをつかんでください」と参加者に呼びかけた。

まず最初にそれぞれの受賞者は子供の頃の思い出を語った。侯氏、大林氏、ニティ氏はともに子供時代に本が好きであったことが後に歩む道に大きな影響を与えたことを述べたが、タン氏は本からではなく近所の子供たちや自然から遊びの中でさまざまなことを学んだと言い、今でも遊び続けたいと語った。

続いて、現在の仕事及びそこへ至る動機づけについてそれぞれが語った。侯氏は映画は成長していく上で勉強するための最高の手段であり、自分が映画づくりで学んだことは人を尊重することと、干渉しないことであると語った。また、大林氏は神話が学校教育で取り上げられない現状について、神話はいろいろな解釈が可能であり、答えがひとつしかない学校教育に対する解毒剤になり得ると語った。ニティ氏はタイの近代史を塗り替えたといわれる仕事について、英雄を描くのが伝統であったのに対し、出来事中心という別の視点を導入したことを紹介した。タン氏は子供の頃、自分のまわりのものをたくさん絵に描き、それを公開展覧会に送って受け入れられたことが励みになったと述べた。

会場からも高校生をはじめ多くの参加者から質問が寄せられた。アジア、あるいは「アジアというくくり方」についてどう思うかという質問に対し、ニティ氏と大林氏はそれぞれ専門分野の立場から論じ、タン氏は民主主義や人権意識がもっと育ってほしいという期待を表明した。そして侯氏は、アジアは多様性の世界だと述べた上で、ハリウッドが世界の映画を画一化しようとしても最終的には飽きてそれぞれの人が自分のこと、自分を取り巻く多様な環境を振り返るようになるだろうと語った。

最後に小倉氏が、文化とは国境をこえるものであり、そこにはすでに交流の意味が含まれている。我々には地域社会の文化を育てていくエネルギーが必要であり、地域社会対地域社会でコミュニケートしていくことで力強いメッセージの交換をすることができると述べ、このフォーラムを締めくくった。

アジア映画セミナー

日　時：9月26日（日）午後0時30分～4時
会　場：エルガーラ大ホール
参加者：約400名

1　テーマ　　「侯孝賢、その映画の世界」
2　プログラム
ディスカッション（午後0時30分～2時）
・パネリスト　福岡アジア文化賞大賞受賞者　侯　孝　賢
映画監督　大林　宣彦
・コーディネーター　映画評論家　佐藤　忠男
作品上映「冬冬の夏休み」（午後2時15分～4時）

3　概　要
アジアを代表する世界的映画監督を迎えて、会場は熱心な映画ファンで満たされた。
ディスカッションは、佐藤氏が侯氏に映画監督になったいきさつを尋ねることから始まった。侯氏は子供のときから映画好きだったが、兵役中に観た映画に感銘を受け「10年かけてなんとかして映画の仕事につこう」と決心したこと、その後、台北の芸術学院映画演劇科を卒業し8年間商業映画のスクリプターを務める中で同世代の青春を描く新しい映画についての考え方を養ったことを語った。また、たくさんの映画を観たり、映画を制作する過程で様々な人と出会った経験によって、自分と他者との違いに気づき、それが自分や他者の理解へとつながり、相対化して別の目で見られるようになったと語り、映画とともに成長してきたことを振り返った。
また侯氏は、これから手がける映画について、俳優たちに撮影するシーンの枠組だけ与えて演出はせず、彼らそれぞれの物語や悩み、過去ではなく未来を撮りたいと述べ、「人」そのものが自分の映画のテーマであり、それを新しい手法で表現していくと力強く語った。それを受けて大林氏も映画監督を野球のキャッチャーに例え、新しい表現を受けとるストライク・ゾーンの発見が新しい制作につながると述べた。さらに侯氏は、原点に立ち戻ればどんな状況でも、ビデオでも映画は作れる、形式に陥りがちであるのをいかに打破するかが大事だと語った。
続けて、大林氏が月から振り返って見た地球の美しさを例に科学文明からはずれたものの大切さに話を向けると、侯氏は欲望充足ばかりに向かっている現代には悲観的だが、映画は他の文化と同様、人を目覚めさせ、「立ち止まって考える」機会になり得ると主張し、さまざまな文化活動が存在する福岡は幸せな所だと述べた。
最後に佐藤氏が、アジアの映画は「いかに人間を理解するか」という問いに向かってきた、侯氏が「ビデオででも映画は作れる」と言った言葉は、実は氏の悲愴な決意を語っており、アジアの映画界全体が資金難に直面している今、手作りの精神でアジア同士が助け合っていくことが大事だ、とまとめた。
この後、侯氏が自らの子供時代の思い出をもとに描いた「冬冬の夏休み」（1984年）が上映された。

侯　孝　賢氏
Mr. Hou Hsiao Hsien

大林宣彦氏
Mr. Obayashi Nobuhiko

佐藤忠男氏
Mr. Sato Tadao

侯孝賢監督傑作選

日　時：8月25日（水）～27日（金）
会　場：福岡市総合図書館映像ホール・シネラ

侯孝賢氏の映画に市民が親しむ機会を提供するために、福岡市総合図書館との共催により、「童年往事 ― 時の流れ」、「恋恋風塵」など侯氏の代表作3本を上映した。

上映スケジュール

8月25日（水）	14：00	童年往事	19：00	恋恋風塵
26日（木）	14：00	悲情城市	19：00	童年往事
27日（金）	14：00	恋恋風塵	19：00	悲情城市

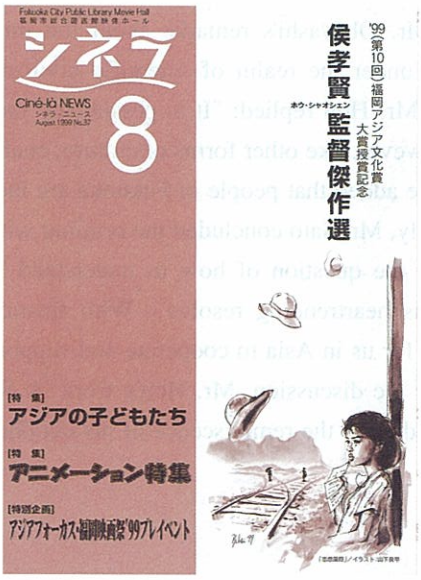
アジアフォーカス・福岡映画祭 '99 協賛企画
「侯孝賢、レトロスペクティブ 1980－87」

日　時：9月15日（水）～19日（日）
会　場：エルガーラ大ホール

侯孝賢氏の受賞を記念して、アジアフォーカス・福岡映画祭企画委員会の主催により、「坊やの人形」、「ステキな彼女」など侯氏の初期作品を中心とした5本を上映した。

上映スケジュール

9月15日（水）	10：30	坊やの人形
16日（木）	10：30	ステキな彼女
17日（金）	10：30	風が踊る
18日（土）	10：30	風櫃の少年
19日（日）	10：30	ナイルの娘



アジア神話セミナー

日　時：9月25日（土）午後0時30分～3時
会　場：福岡市役所15階講堂
参加者：約350名

1　テーマ　　「九州の神話からみる日本、そしてアジアへ」
2　プログラム

趣旨説明	上智大学アジア文化研究所教授	石澤　良昭
受賞者紹介	九州大学教授	松原　孝俊
	宮城学院女子大学教授	後藤　　明
基調講演	福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者	大林　太良
パネルディスカッション		
パネリスト		大林　太良／松原　孝俊／後藤　明
コーディネーター		石澤　良昭

3　概　要

「人の住むところに共通する風景、価値概念を追って、海を越えた神話のダイナミックな流れを考えていく」―　コーディネーターの石澤氏がそのように趣旨を表現したセミナーへの関心は高く、世代を超えた多くの参加者で会場は埋め尽くされた。基調講演で大林氏は、8世紀という早い時代にまとめられた神話体系として世界的にも特異な位置にある『古事記』『日本書紀』の神話を周辺諸地域の神話と比較しながら、周辺諸地域との関係が日本文化の形成にとって非常に重要であったこと、そしてその際に九州という地が大きな役割を果たしていたことを論じた。松原・後藤両氏により「古今東西の知識にあふれた歩くデータベース」（松原）、「日常生活の中の日本人の感覚を大事にしている研究者」（後藤）と紹介された大林氏ならではの話に、参加者は熱心に聞きいっていた。

続くパネルディスカッションではまず、松原氏が朝鮮半島、石澤氏が東南アジア、後藤氏がメラネシア・ミクロネシア・ポリネシアといったそれぞれの専門地域にみられる神話と日本神話の関係を論じ、日本文化の中にさまざまな文化の流れが重なり合っていることを示した。その後、再び大林氏を迎え、会場から寄せられた質問に答えるという形で進行した。中でも、「神話の類似は人の移動によるものか、文化の類似によるものか」という質問には大林氏をはじめ各パネリストが多様な事例を挙げ、移動、伝播、権威ある他文化からの流用、機能・構造上の類似など、さまざまな可能性を指摘した。また、「なぜ神話に興味をもつのか」という質問に対し大林氏は「おもしろいから」と答え、これからは「月」にまつわる神話から人類全体のものの考え方の地域差を探求していきたいと、神話研究への更なる熱意を示した。最後に、神話研究には未解決の問題が多いが、文化のクロスロードとして日本文化の形成に重要な役割を果たした九州から神話に興味をもつ人が出て層が厚くなれば、そうした問題も解明されていくだろう、と期待を込めて語った。

大林太良氏
Professor Obayashi Taryo

松原孝俊氏
Professor Matsubara Takatoshi

後藤　明氏
Professor Goto Akira

石澤良昭氏
Professor Ishizawa Yoshiaki

東南アジア歴史セミナー

日　時：9月25日（土）午後3時～5時30分
会　場：アクロス福岡イベントホール
参加者：約200名

1　テーマ　　「アユタヤと日本人」
2　プログラム

趣旨説明	東京大学社会科学研究所教授	末廣　昭
基調講演	福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者	ニティ・イヨウシーウォン
パネルディスカッション		
パネリスト		ニティ・イヨウシーウォン
	神田外語大学学長	石井　米雄
	城西大学教授	永積　洋子
コーディネーター		末廣　　昭

3　概　要

17世紀一大貿易拠点として繁栄した都市アユタヤから、鎖国時代も続いたタイと日本の関係を国家という枠を越えて考え直すという知的刺激に富んだこのセミナーでは、熱心に聞き入る若い参加者たちの姿がとりわけ印象的だった。

ニティ氏は基調講演において、アユタヤと日本人との関係を17世紀の貿易、移民、政治的介入を中心に論じた。鎖国以後も中国人、オランダ人を仲介としてアユタヤからの鹿皮やスオウ材、日本からの銀をめぐる交易が行われていたことをはじめ、日本で迫害を受けたキリスト教徒や貿易商人、日本人義勇隊、海賊等が全盛時で人口1,000～1,500人の日本人町をアユタヤに形成していたこと、また、特に鎖国以後の交易やアユタヤに形成されていた日本人町、1600～1630年の間に山田長政を頭領とした日本人社会がアユタヤの政治に大きく関与していたことなどの話題が提供され、400年あまり前の国家の枠を越えた交流の姿が明らかにされた。

パネルディスカッションではまず会場からの質問に始まり、続いて、永積氏が長崎出島のオランダ人が残した記録からタイと日本の間の貿易と移民の関係を、石井氏が多国籍港市国家アユタヤにおける軍人／商人としての日本人の政治への関与をそれぞれ論じ、その後、全員によるディスカッションへと進んだ。その中では、港市政体アユタヤが「国家」という近代的概念では捉えられないことが各パネリストから強調された。

最後に末廣氏が、タイと日本の交流の歴史において重要な役割を果たした自由な人の動きは、「幕府」対「王朝」という枠組では捉えられないことを再確認し、「地方にいると中央の見方に縛られない別の見方ができる」というニティ氏の言葉をひいてこのセミナーのまとめとした。

ニティ・イヨウシーウォン氏
Professor Nidhi Eoseewong

石井米雄氏
Professor Ishii Yoneo

永積洋子氏
Professor Nagazumi Yoko

末廣　昭氏
Professor Suehiro Akira

疾走するアジアの現代美術

日　時：9月25日（土）午後5時～7時
会　場：パフォーマンス　博多リバレイン5階 アトリウムガーデン
　　対　　談　福岡アジア美術館　彫刻ラウンジ（博多リバレイン7階）
参加者：パフォーマンス　約２５０名
　　対　　談　約１００名

1　テーマ　　「君はタン・ダウを見たか」

2　プログラム
　パフォーマンス　福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者　　タン・ダウ
　　※協力：福岡アジア美術館ボランティアの方々
　対　　談　　タン・ダウ
　　福岡アジア美術館学芸課長　　後小路雅弘

3　概　要

「私たちはお祝いをするために集まりました。」タン・ダウ氏のこの言葉でパフォーマンスが始まった。東南アジアに住む人々の生活に不可欠で、幸運をもたらすものと信じられるバナナを題材に展開される「バナナ・プロジェクト」の一環として、今回のパフォーマンスは行われた。

タン氏とパフォーマー数名が、祝福の言葉を口にしながらまわりを取り巻く観客の中に入っていき、バナナの葉を手に出会った人々の幸せを祈る。また、それぞれが身につけた衣装の長い裾を可動式テーブルの上にかけることによって突如出現したおもてなしの食卓には、バナナの葉をおいてお菓子を盛り、タン氏らは「この先ずっとみんなが飢えることのないように」と祈りながら観客をその食卓へ誘った。

なぜバナナなのか。その答えは図らずも観客の言葉からでた。「バナナの葉の下を通るとなんだか幸せな気持ちになる。」参加した観客からそういう声が漏れ聞こえた。

隣接する福岡アジア美術館に続く階段にバナナの葉がさしかけられ、その下を観客は対談会場へと上っていき、パフォーマンスは幕を閉じた。

続いてタン氏と後小路氏により対談が行われ、タン氏のこれまでの活動や今回のパフォーマンスへの思い、これからの活動等について語られた。中でもパフォーマンスの題材であったバナナに関しては、東南アジアにおいて、神聖なものであるとされながら、一方で人を脅かすものでもあるとみなされている点を指摘し、「バナナは変化しないのに、人の見方、心が変わる」という点に着目し、このプロジェクトをはじめるに至ったと述べた。

最後に、パフォーマンスを準備の段階からいっしょに創り上げてきた福岡アジア美術館のボランティアにタン氏から感謝の言葉が述べられ、対談は終了した。

バナナの葉を手にパフォーマンス中のタン氏
Mr Tang Da Wu at his performance with a banana leaf in his hand

後小路氏（左）との対談
Discussion with Mr. Ushiroshoji (left)

親子で体験するタン・ダウの世界　～バナナの心、人の心～

日　時：９月23日（木）午後１時30分～３時30分

場　所：福岡アジア美術館８階・交流スタジオ

このワークショップは２５日のパフォーマンスに先駆けて行われた。

バナナの樹にまつわる物語、習慣、人々との関わりなど、バナナと人々とのふれあいをテーマに、小中学生とその家族が芸術・文化賞受賞者タン・ダウ氏とともに絵を描いたり、物語を作ったりして楽しいひと時を過ごした。ワークショップの中で参加者が思い思いに絵や願い事を描いて製作したバナナの葉は、パフォーマンス当日、会場に飾られた。

バナナの葉を前に
Working with banana leaves

タン・ダウの軌跡展

期間：９月23日（木）～11月７日（日）

場所：福岡アジア美術館交流ギャラリー

タン・ダウ氏の受賞を記念して、氏の過去20年にわたる芸術活動を記録写真やビデオを中心に、福岡アジア美術館所蔵のドローイング、オブジェなどもあわせて展示紹介した。

タン・ダウの軌跡展風景
The Documentation of Tang Da Wu and His Works : 1979-1999

学校訪問

今回、初めての試みとして受賞者による学校訪問を行った。

＜城南中学校＞
日　時：９月２８日（火）午後２時１０分～３時４０分
テーマ：「日本の中学生におくるメッセージ　～映画との出会いを通じて～」

概　要

侯孝賢氏は中学１・２年生約６００名に向けて講演を行った。

まず侯氏は「皆さんの年代は感覚が非常に鋭く、一番敏感な年頃である。しかし、教育を受けていくうちに、それがだんだん鈍くなっていく。感覚を敏感に保っていくことが大事なことだ」と述べた。侯氏は少年時代の光景が今でも鮮烈な感覚の記憶として残っており、それが後に制作した映画の中で顔をのぞかせていると語った。映画は観察力で作り上げられているが、その観察力でもっとも大事なのは直感であり、自分の感覚を信じることは人生の中でとても大きな課題であると語った。

そして、人間が成長していく過程の中で、育った環境、家庭、学校はその人の人生に大変大きな影響を与えるということを語り、また、子供の時に羽根を持った種を見て「その木は意志を持っていて、風があることを知っている」ことを発見したという思い出を例に、教科書から教わることと自分で発見することはまったく違うということを示し、自分の経験を大切にする必要性を繰り返し述べた。

侯氏が質問を求めると、会場の中学生から次々と手が挙がった。まず「日本に来て印象に残ったことは？」という質問に対し侯氏は、何ごともよく整っていて気がつく民族だと思ったと答え、他に印象深かったこととして、京都の寺の境内で缶蹴りをしている子供を見て、寺が美術品である一方で身近なものでもあることに感銘を受けたと述べた。

「子供のどんな表情が好きですか」という質問には、子供を撮るのは好きで、まず自信をもてるようにしてあげると子供は天真爛漫にのびのびと演じてくれると語った。そして、遊びは大事であり、自分の中に目的のない遊び心を持ち続けることが貴重だと述べた。

最後に侯氏は、こんなに多くの生徒のストレートなまなざしを感じるのは初めてで、その前では知識から出る言葉が力を失うような不思議な感覚を味わったと感想を語った。そして、「遊び心や情熱を忘れずに、早熟せずにゆっくり大人になって下さい」と生徒たちにメッセージを贈った。

この後生徒たちは、映画『冬冬の夏休み』の中で使われた「赤トンボ」の歌を感謝の気持ちを込めて合唱し、全校生徒の協力で集められた台湾大地震のための義援金と千羽鶴を侯氏へ託した。そして、侯氏が校舎を撮影し、和やかな交流がおこなわれた。

＜高取中学校＞

日　時：９月２８日（火）午後２時～３時３０分

テーマ：「私の歩んできた道」

概　要

大林太良氏は、全校生徒約７００名に向けて講演を行った。冒頭で、大林氏は中学生に話をするのは初めてであり、氏の少年時代と現在とでは社会環境がかなり異なるが、参考になれば幸いであると述べた。

まず、小学生のときに家族とともに奈良や伊勢の由緒ある遺跡、神社などをまわったこと、さらに小学生から中学生のときに『古事記』『日本書紀』に関する本を大いに読んだことなどを紹介し、それが民族学・神話学研究の道に通じる日本の古代に興味を抱くきっかけとなったと語った。

次に、旧制高校時代に教科書に載っている小説や詩などについて友人と語り合ううち、それを文学として鑑賞する気持ちが芽生えたことや、初めてのヨーロッパ留学で、現地の研究者が自分の研究の領域だけでなく世界全体についても関心を持ち、はるかに広い知識をもっていることに驚きを感じたことなどを語り、それら青年時代の経験の一つひとつによって、「新しい知的世界がぱっと目の前に開けていった」と、そのときの感動を表現した。

さらに、それぞれの大学がその伝統に誇りをもち、他の大学の研究や流行にとらわれず独自の道を歩んでいるというヨーロッパの姿に、その当時研究者が少なかった日本神話の研究をやり続けた氏自身の姿と重ねあわせながら、「人からのアドバイスを謙虚に受け入れる気持ちをもつことは大切だが、みんなと同じことをやろうとするのではなく、少し人と離れたとしても、他人に盲従せず、意志の強さをもって自分自身の道を歩む」ということの大切さをメッセージとして贈った。

生徒からの「神話研究の道を選んだきっかけは何か」という質問に、大学の助手のときに「日本文化の起源の研究をするなら、まず日本のまわりをよく見ることが大切である。」とのアドバイスを受けてはじめた東南アジアの研究で、日本の神話との類似性に気がついたことが本格的に神話の研究をはじめるきっかけとなったと述べた。

最後に大林氏は、「本はとにかく最初から最後まで読むこと。読む中で、何かおもしろいものに気がつくことがある。若い頃、本を多読する時期が必要である。」と述べて講演をまとめた。